

七月上旬のある日、娘から電話が入った。

「八月八日〜十日に伊勢の神宮式年遷宮お白石持行事に行くけど、一緒にどう？」
二十年毎に遷宮があることはいつ頃からか憶えてないが、知っていた。私は伊勢参りに妻と一緒に二回行っており、娘には悪いが式年遷宮だからと言われても、それ程興味が沸かなかった。たぶん信仰心が薄いためであろう。娘の説得にのりくらりと対応していたが、誘いの言葉にだんだんと心が伝わってきて、気持ち揺れ動いた。そして、次の言葉で遂に行くことを決心した。

「二十年に一度だから、もしかして次は無いかもよ……一応、ツアー資料をファックスするね」

たしかに二十年後は九十一歳、たとえ生きていたとしても元気でいる確立は？ となると、あまり自信がない。それならば元気な内に人生経験を増やすことは良いかもと、いつの間にか考え方が変化した。

具体的にはお白石の献納に参加する内容であるが、あの猛暑の夏が過ぎ、秋を迎え遷宮の儀も終わった十月、伝統ある行事に参加できた喜びを皆と分かち合えたこと、ご奉仕で大きな感動を貰ったことで誘ってくれた娘に今は素直に感謝したい。

何と説明すれば良いのか……言葉にならないが神聖を覚え、大きな力に抱かれるように感じ、古代の人々と自分がどこかで繋がっているような気がしたのだ。

これは言葉や理屈ではない、素直に自分の心の奥にあるんだと感じた。やはり日本人ゆえだろうか。

今回の所感であるが、伊勢には日本の魂の源がある。心打つ感動がある。この国の古代に触れる思いが深くなる何かがある。

この伊勢での貴重な体験を、出来れば伝えたいと考え、にわか勉強であるが自分の頭を整理する意味もあり、各種文献を参照しながらまとめてみた。

・神宮式年遷宮とは

伊勢神宮で二十年に一度行われる大祭で、国の永遠な平安を願う神宮最大で最重要のお祭。飛鳥時代に始まり約千三百年間継承されてきた。二十年を一つの区切りとして、この国の心を、姿をそれぞれの時代の中に問い、弥栄を願うもので、その根底にあるものは、自然、つまり八百万の神々とともに、人として生かされていることへの感謝である。

今回は平成十七年の用材伐採を皮切りに、八年の歳月をかけ準備が進められた。

・内宮（ないくう）は天照大御神（あまてらすおおみかみ）をおまつりしている。

今回、私はこの内宮の正殿に敷き詰める「お白石」を家族と一緒に奉納した。

天照大御神が伊勢に鎮まれたのが紀元前四年、今から二千年余り前となる。

・外宮は豊受大御神（とようけのおおみかみ）で神々にたてまつる食物をつかさどる。
「こちらでも」お白石持ち行事」が執り行われる。

・参加者は全員白装束（写真参照） 私は初めて真っ白な革靴を買った。

・今回、神社関係者を中心とした全国からの奉献者は七万三千人（期間中の二十日間で、一日当たり約四千人） おもてなしボランティアは一日約四百人。

・お白石持ち行事の前日に二見浦の興玉（おきたま） 神社に心身を清める禊（みそぎ）の浜参宮するという祭事があった。

翌日早朝から、お白石奉献車を曳く約二百六十メートルのロープの両側に約二千人が配置され、車を曳いた。距離にして六く七百メートルあっただろうか。道中は伊勢に伝わる木遣唄が響き、我々は「エンヤ！エンヤ！」の掛け声で腕を振り上げた。その後、一人一人に白布が渡され、お白石を一つ頂き白布に載せ、完成した正殿が建つ御敷地に静かに、無心で奉納した。

・天照大御神のご神体は鏡で初代神武天皇と共にあった。

現役の時、東南アジア、中東各地に出張し、人々の宗教心の強さを垣間見ながら、自分の宗教に対するいい加減さを思い知ったことを思い出す。

今回、日本の神道の深さ（理屈や言葉ではなく）を経験することができ、これを厳格に守っている日本の心に触れ、この歳になりました少し素直になれたような気がする。人間は争っている場合ではない、人間はみな同じで、平安で幸せになるべきだ。

